

# アプレイウスにとっての哲学とは何か？

小島 和男

## ガイウス学派という空想

一般に『黄金のろば (*Metamorphoses*)』の作者として知られているアプレイウスだが、自身は「プラトン主義哲学者 (philosophus Platonicus)」と自認していた。しかし、所謂「哲学者」としての評価は低い。ヘイトは「アプレイウスは哲学について著述したが、際立ってプラトニストというわけではなかった<sup>1)</sup>」と言い、ディロンは「アプレイウス自身はそうは思っていないが、アプレイウスは哲学者ではないということは念頭に置いておこう。従って、もし彼に価値があるとしてもそれは、どの程度我々に典拠を一つでも複数でも伝えてくれるかどうかにかかっている<sup>2)</sup>」と言っている。また、テータムも「アプレイウス本人が知らず知らずのうちに哲学者の真の概念を伝えているという場合はあるにしても、哲学をするうえでアプレイウスに取り組む人間なんていないだろう<sup>3)</sup>」と言う。

しかし、哲学者でないと言い切るディロンではあるが、アプレイウスを

- 
- 1) Haight (1963), p. 76.
  - 2) Dillon (1977), p. 311.
  - 3) Tatum (1979), p. 105.

アプレイウスにとっての哲学とは何か？（小島）

プラトン主義の受容史の中に確かに位置づけてはいる。1977年のディロンの『中期プラトン主義者たち』(*The Middle Platonists*)は、プラトン以降のアカデメイアから新プラトン主義者プロティノスより前までのプラトン解釈者を、その思想的傾向に注目し時系列に沿って扱っているわけだが、アプレイウスを所謂ガイウス学派のひとりとして取り上げている<sup>4)</sup>。ガイウス学派というのは後述するように空想の産物かもしれないのだが、2世紀のガイウスから影響を受けたとされるプラトニストの学派である。ガイウスの他にアルキノオスと同一視されたアルビノス、この小論の主題となっているアプレイウスがその学派に数えられる。また、マルクス・アウレリウスの典医として有名なガレノスも、ディロンはこの学派に含めている<sup>5)</sup>。

北アフリカのマダウロスに120年代半ばに生を受けたと言われるアプレイウスは、新生カルタゴで学んだ後、おそらく20代後半にアテナイに赴き、また東方を遍歴し、プラトン主義哲学及びさまざまな神秘宗教や魔術を学んだとされる。その途中、スミルナでアルビノスに師事し、その限りでガイウス学派に属するとされる訳だ。さらにディロンはアプレイウスの諸作品を概観した後に、その思想を、自然学、倫理学、論理学の三つの方向から詳細に研究し、結果としてアプレイウスをプラトン哲学者として全面に据え論じてしまっているように見える。

しかし、このアプレイウスの属するガイウス学派という想定は根本から覆されている。というのは、このガイウス学派という想定は、アプレイウスが師事したとされるアルビノスがアルキノオスと同一視されてしまっていたので成立する話であったからだ。アルビノスの作と誤認されたアルキノオス『プラトン哲学講義』の思想内容とアプレイウスのそれとの類似性から学派的な繋がりを、アルビノスとアプレイウスに見出していたのである。19世紀末、フロイデンタールによって提唱された、アルキノオス

---

4) Dillon (1977), p. 306-38.

5) Dillon (1977), p. 339-40.

(*Ἀλκίνοος*) はアルビノス (*Ἀλβίνοος*) の誤記であるとした上でのアルキノオスとアルビノスの同一視は<sup>6)</sup>、以降長く受け入れられてきたが、ジュスタ<sup>7)</sup>、或いはウィテッカーによって反論され<sup>8)</sup>、結果、ディロンもそれに説得されている<sup>9)</sup>。現在の哲学史研究において両者は別人であるとはほぼ確定したと言ってよい。そして、そのアルキノオスについては『プラトン哲学講義 (*Διδασκαλικὸς τῶν Πλάτωνος δογμάτων*)』の作者ということ以外はほぼ何も知られていない。アプレイウスやアルビノスとの関係も分かっていないし、アプレイウスがいたところにいたかどうかは全く分かっていないので、アルキノオスも含め「ガイウス学派」と言っても、それはほぼ根拠のない空想に過ぎないことになってしまう。

しかし、もしまだ「ガイウス学派」という空想が許されるのなら、この学派の特徴は第一には、アテナイを中心としたプラトン解釈に対して、従来とは異なる解釈方法を提示したことにあるということになろう。つまり、マルクス・アウレリウスによって176年にアテナイに設置された哲学の四つの講座—プラトン主義、ペリパトス派、ストア派、エピクロス派—の、プラトン主義の講座主任アッティコスに代表されるプラトン解釈の手法とは、アリストテレス的な要素を可能な限り排除する立場であるが<sup>10)</sup>、アルビノス、アプレイウスなどの形成したガイウス学派は、プラトン解釈に際し、ペリパトス派の哲学用語や概念を積極的に採用し、その結果、両者の学説の一致を認めるに到っているからである。さらにこの学派は用語のみならず、ペリパトス派の「アリストテレス著作」の読解手法をも採用し、やはりその結果として「プラトン著作集」をよりシステムティックな体系として示そうとしたのである。この点についてはマーランが<sup>11)</sup>、またデ

---

6) Freudenthal (1887).

7) Giusta (1960-1).

8) Whittaker (1990), Introduction. 或いは Whittaker (1984), pp.XIX-XXI.

9) Dillon (1993), Introduction.

10) アッティコスの断片5

11) Merlan (1967).

アプレイウスにとっての哲学とは何か？（小島）

イロンが指摘している。例えばディオゲネス・ラエルティオスに代表される従来の対話篇分類において、プラトン作品は「最上位区分として教示的作品と探求的作品に、教示的作品は理論的作品と実践的作品に、理論的作品は自然学的作品と論理的作品へ<sup>12)</sup>」と、各ジャンルが並置されているのに対し、20世紀末にアルビノスの作品として認められた『プラトン対話篇入門 (*Εἰσαγωγή εἰς τοὺς Πλάτωνος Διαλόγους*)』第6章では、「それら〔論理的な対話篇、『パルメニデス』や『クラテュロス』など〕は、それらを通してものごとの真が証明され、偽が論駁される、分割と定義についての方法や、分析や推論に関する内容を含んでいる」とするのである。これは、プラトンの論理学的著作を、他の教導的な著作の読解に「方法」を提供する作品、言い換えれば真理基準を示す道具と位置づけることに他ならない。

また、プラトン読解へのアリストテレス哲学の活用は、アプレイウスではアルビノス以上に強く認められる。それを代表するのは、アプレイウスが書いたとされることの多い『命題について (*Περὶ Ἐρμηνείας*)』である。この作品は全体として、アリストテレス論理学をストア論理学と共に説明するいわば論理学の教科書であり、哲学に真偽を提供する「方法」として論理学を位置づけようとする立場への自覚的言及は認められないものの、第4章冒頭で『テアイテトス』に言及しながらも、全体としてアリストテレス論理学を説明しようとする姿勢に、後の新プラトン主義者のような、両者の一致といった積極的な主張を認めることができる。この作品の位置づけについてはスリッヴァーンに詳しいが<sup>13)</sup>、モレッシーニはそもそもアプレイウスの作品ではないとしている<sup>14)</sup>。

---

12) ディオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』III, 49.

13) Sullivan (1967), Introduction, pp. 1-14.

14) Moreschini (2015), pp. 204-18.

## ソフィストとしてのアプレイウス理解

テータムは「哲学をするうえでアプレイウスに取り組む人間なんていないだろう」と述べたが、哲学者としてではなく、ソフィストとしてのアプレイウスに取り組む研究が20世紀末から盛んになる。所謂「第2次ソフィスト思潮」の研究が盛んにおこなわれたのと連動してのことである。ハリソンは「アプレイウスの業績は、ローマ支配下の2世紀のアフリカでインテリ、ソフィストとして活動したことのみならず、同時期のより大きなギリシア第2次ソフィスト思潮の枠組みの中にある<sup>15)</sup>」と語っている。彼はアプレイウスをローマの文化教養をカルタゴに伝えた紀元2世紀のソフィストと称されるにふさわしい人物と評しており、その限りで、アプレイウスの代表作として知られる『黄金のろば』についても、啓蒙小説ではなく、すぐれた娯楽作品だと考えている。ハリソンはまたヒルトンやハニシクとともにアプレイウスの作品を英語に翻訳しているが<sup>16)</sup>、これもタイトルから察せられるように、『ソクラテスの神について (*De Deo Socratis*)』も含め、(哲学ではなく) レトリックに関わるとして彼らがアプレイウスのいくつかの作品を解し翻訳したものである。このハリソンの研究については、古典ギリシア期のソフィストに比べるとまだまだ研究の少ない古代ローマ期に於けるソフィストとしてアプレイウスを描き出しており、そういった意味では、彼のある一側面に光を当てた画期的な業績ではある。

なお、国内に於いては、近年、哲学史的な書籍及び翻訳がいくつか出ているが、多くはアプレイウスについてはまったく論じていない。たとえば、古代哲学の中でもギリシア以降の、いわゆるヘレニズムおよびローマ帝国期を扱った中央公論新社の『哲学の歴史』の第二巻を見てみよう。そこで

---

15) Harrison (2000), p.v.

16) Harrison et al (2001).

アプレイウスにとっての哲学とは何か？（小島）

アプレイウスはプラトン主義の伝承者とはされているものの、「専門的な哲学者ではな」く、「プラトン主義の浸透と共に、その通俗化を物語る」事例として扱われている<sup>17)</sup>。おそらくこの見方は、ディロンの評価やハリソンの理解に影響を受けてのものであろう。アプレイウスはプラトン主義を通俗化し広めたソフィストである、と。ハリソンは近著においても、やはりその解釈は崩していない<sup>18)</sup>。しかし、何を以ってして「哲学者」と呼ばないのかに関してははっきり語ってくれているわけではないし、勿論、その哲学的側面を掘り下げているわけでもない。

ちなみに、第2次ソフィスト思潮研究の権威スウェインは、アプレイウスをソフィストとして理解することにも反対の立場をとっており、「アプレイウスは芸人であり遊び人であり、利口ではあったが底の浅い人間」であり「我々は彼をインテリとだけ呼ぶべきである」と非常に否定的である<sup>19)</sup>。

## プラトン主義哲学者としてのアプレイウス

とはいえ、これまでアプレイウスを本人の言う通り「プラトン主義哲学者 (philosophus Platonicus)」として評価しようという研究者はいないわけではなかった。グローニンゲンの研究は、まさにタイトルから理解できるように、アプレイウスをプラトン主義哲学者として描き出そうとしたものである<sup>20)</sup>。グローニンゲンの研究の独自性は、アプレイウスを古典ギリシア語で書かれたギリシア哲学をラテン語に翻訳した、いわば翻訳者であるという事実を強調しているところにある。だが彼のこの独自の解釈は、アプレイウスの「プラトン主義」を、或る意味でプラトン作品の翻訳

---

17) 『哲学の歴史』第二巻（内山勝利責任編集、中央公論新社、2007、p. 474）

18) Harrison (2013).

19) Swain (2004), p. 12.

20) Groningen (1987), pp. 395-475.

者と言う意味に限定してしまっている可能性がある。

また、ハーベルミルは、アプレイウスの『ソクラテスの神について』についての論文の冒頭でこう語る。

ルネサンスが訪れて以来久しく、『ソクラテスの神について』の名声は、同じ作者の最高傑作『黄金のろば』の名声の陰に隠れてしまっている。このアフリカ人の奇妙なレトリックの才能の成果である他のマイナーな成果と同様に<sup>21)</sup>、『弁明 (*Apologia*)』というこの公の場での長い説諭はアプレイウスの弁論家としての特別な才能を、『ソクラテスの神について』は脈々と受け継がれたプラトン主義について書く哲学作家としての特別な才能を、十分に証明している。『ソクラテスの神について』は、ミドルプラトニストの哲学の重要なテキストの一つとして、壮麗で、はっきりとした説諭という性質を持つ演説の一篇として研究するにふさわしい。タイトルからはすぐには伝わらないかもしれないが、我々に伝わっているキリスト教的ではないダイモン論の、非常に魅力的なオリジナリティにあふれる論が核として含まれている<sup>22)</sup>。

これもアプレイウスをプラトン主義哲学者として肯定的に評価していると言ってよいのではないだろうか。

さらにまた、ジョエによる2世紀のプラトン主義者達の断片と証言集がある<sup>23)</sup>。ここでアプレイウスは、2世紀のガイウス門下のプラトン主義者であり、この学派の再構成を担う証言者として、その思想と共に多くの箇所に取り上げられている。

---

21) 『フロリダ』のこと

22) Habermehl (1996), p. 117.

23) Gioe (2002).

## フレッチャーとモレッシーニの見解

2013年のハリソンを皮切りに、ここのところ一年に一冊のペースで、アプレイウスに関する画期的な単著が刊行されている。まずはフレッチャーとモレッシーニだが、フレッチャーは、まず、アプレイウスが哲学者として否定的に評価されている原因を探る。フレッチャーによれば、その原因の一端は、『黄金のろば』がアプレイウスの中心的な作品であるという通念に、また、アプレイウスの作品を「文学的」かつ「修辭的」な作品（『黄金のろば』、『弁明』、『フロリダ (Florida)』）と「哲学的」かつ「プラトンの」な作品（『ソクラテスの神について』、『プラトンとその教説』、『宇宙論 (De Mundo)』）に区分してしまったことにある。このように作品群をはっきりと二つに分けてしまえば、アプレイウスの理解は、プラトニズムにちょっと手を出してみた作家か、小説の創作に手を出してみたプラトニストになってしまうだけだ、とフレッチャーは言う。そして彼は、アプレイウスのプラトニストとしての固有性を正当に評価しようとし、アプレイウスのプラトン主義は、‘impersonation of philosophy’の結果であるとする。‘impersonation of philosophy’によって、アプレイウスはプラトンの代理であり、彼の代わりにプラトンの哲学を実践する人物として語ることが出来るようになる、と主張するのである。

モレッシーニは、フレッチャーに共感しつつ<sup>24)</sup>、アプレイウスの著作の執筆順を明らかにしていく方法をとる。1980年代に注目されたラテン語散文のクラウスラにみられる一定のリズムに注目する文体論的な研究によって、『宇宙論』と『プラトンとその教説』は他のアプレイウスの作品と区別され、偽作の嫌疑もかかったわけだが、モレッシーニはこの文体の違いを執筆時期の違いだと考える。『弁明』が最初期の作品であり、『宇宙

---

24) Moreschini (2015), p. 27, fn. 54.

論』と『プラトンとその教説』を晩年の作品だとするモレッシーニによれば、アプレイウスは、正にソフィストであると同時に哲学者であったのであり、それが彼の生きた時代には可能であったと論じている<sup>25)</sup>。アテナイで哲学を学んだアプレイウスは、若いころから自分は「プラトン主義哲学者」だと宣言していて、晩年になって以前学んだプラトン主義についての著作をすることにした。故にアプレイウスは死ぬまでプラトン主義に関与しており、我々に残されている彼の様々な作品はプラトン主義哲学者としての彼の執筆業の経歴の様々な瞬間を再構築する材料となる、とモレッシーニは語る。

## ストーバーの研究

研究史紹介の最後に、2016年に刊行されたストーバーの著作について触れたい。『土星とメランコリー』で有名なレイモンド・クリバンスキーによって1949年に報告されたR写本は、アプレイウスの哲学的著作を集めたものであったが、その中には、*Expositio* と呼ばれるプラトン対話篇の便覧が紛れ込んでいた。ストーバーはその作者がアプレイウスであり、それは『プラトンとその教説』の失われた3巻の一部であるということをも明らかにし、2016年に校訂し注釈をつけたテキストを刊行した。そのテキストは、おそらく前が欠落しており、『国家』3～10巻、『エウテュロン』、『メネクセノス』、『ソクラテスの弁明』、『クリトン』、『パイドン』、『法律』、『エピノミス』、『書簡集』、『パルメニデス』、『ソピステス』、『政治家』、『ティマイオス』、『クリティアス』の短い解説ないしはアプレイウスなりの要約と、『パイドン』の解説と『法律』の解説の間に挿入されている、*divisio librorum* と名付けられた一説からなる。

---

25) Moreschini (2015), p. 27.

## アプレイウス研究の潮流にあるおかしな視点

以上のように 20 世紀後半以降のアプレイウス研究史を概観してみると、まずはヘイトやディロンによる低い評価があり、それが後々まで深く影響しているように思われる。また、ガイウス学派という想定ができなくなってしまった以上、特定の哲学の学派に属していたか分からないアプレイウスが「ソフィスト」という枠組みでとらえ直されていったのも十分自然な流れであろう。それに対して、ここ数年で、それへのカウンターアタックとして「プラトン主義哲学者」としてアプレイウスを解釈するといったフレッチャーとモレッシーニの著作が出現しているように思われる。ストーバーの発見も、アプレイウスがむしろプラトンの著作に寄り添っていたことを肯定する材料の一つとなる様にも見える。

しかし、私はこういった研究の潮流にひとつの非常に根本的な疑問を呈したい。というのは、いったいこうしたアプレイウスが哲学者であるとか、ソフィストであるとか、そのような視点、またはレッテル付けにどのような意味があるのだろうか。この問いは乱暴にも感じられるかもしれないが、ここではまず、この点について考えてみたい。

はじめに断っておきたいのは、そこで論じられているのが、アプレイウスがその時代、その当時の人々に、「哲学者」として受け入れられていたのか「ソフィスト」として受け入れられていたのかという問題であれば、勿論それは十分歴史的に意義深いと思われる。しかし、私が問題だと思うのは、アプレイウスという歴史上の人物を、現代の我々が「哲学者」とみなすか「ソフィスト」とみなすか、また他の読者たちにみなさせるか、という議論にどのような意味があるのかということである。つまり、アプレイウスについて語る時、何故「アプレイウスは哲学者ではないということは念頭に置いておこう」と言わなければならないのかということである。もしくは「アプレイウスは哲学者であると念頭に置いておこう」と言わな

ければならないのかということでもよい。そのようなレッテル付けはテキストに当たる際に必須のものなのだろうか。

そもそも哲学者に対しての評価はマチマチである。例えば、ある人物に対して「〇〇は哲学者とは言えない、思想家である」という研究者がいる。その場合、その研究者の中には思想家はかくかくしかじかであり、哲学者はかくかくしかじかであり、このような点で二つは異なっているのだという決めつけのような理屈があって、〇〇を哲学者ではなく思想家であると断じるのであろう。しかし、それはエビデンスがあって言えることではないように思う。おそらく、その人の哲学者観、思想家観を基に言うだけで、聞き手はそれに共感できるかできないかだけの問題になるだろう（ほとんどの哲学の問題と同じように）。となると、アプレイウスのこの場合はどうであろうか。それと同じではないだろうか。お好み焼きは人によって、おかずでも主食でもあり得る。同様にアプレイウスも見る人によって、哲学者にも見えるしソフィストにも見えるということではなかろうか。

さらに難しいのは、「哲学者とは何か」という問題が、プラトン哲学においては特に、重要なものであるということである。しかし、ディオロンはその著作で「哲学者」を定義してはいない。また、アプレイウスを低く評価する研究者は、アプレイウスの作品にオリジナリティがない、といったような表現を使う。ディオロンの「もし彼に価値があるとしてもそれは、どの程度我々に典拠を一つでも複数でも伝えてくれるかどうかにかかっている」という表現にもそれは表れている。しかし、オリジナリティが「哲学者」に必須であるということへの言及はおそらくないし、そのオリジナリティがないということもその研究者の所感に過ぎない場合も多いのではなかろうか。勿論、アプレイウスを哲学者であると断じる場合にも同じような問題がそこには横たわっている。哲学者とは何かを正面から論じることなしに、誰それを哲学者であると語るのは、厳密にいえばできることではないのだろう。

アプレイウスにとっての哲学とは何か？（小島）

しかし、そういった難点を、先のフレッチャーとモレッシーニは幾分クリアしているかもしれない。まずモレッシーニであるが、彼は、アプレイウスの著作順を明らかにすることで、人生においてずっとプラトン主義に関わってきているアプレイウスを浮き彫りにする。その限りにおいて、アプレイウスは「プラトン主義哲学者」であったというのであり、それはアプレイウスのプラトン主義哲学への理解の多寡を問題とはしない見解であると言える。また、ソフィストでもあることが出来たという見解も、もしそれが言えるのであれば、穏当な落ち着きどころであると思われる。

次にフレッチャーだが、おそらく彼は、哲学そのものにもプラトン本人にもなれない（当たり前だが）アプレイウスが、‘impersonation of philosophy’をしているのだということを語ることで、‘impersonation of philosophy’こそ哲学する誠実な方法なのだと考えているようだ（そこまでは言っていないと言われそうだが）。何故これまでのアプレイウスの評価が低いのか、アプレイウスが何故、正当な哲学者とみなされないのかと言うと、アプレイウスがわざと、各々の作品において‘impersonation of philosophy’を自覚的にしているからであり、それ故、直接哲学を行っているようには見えないが、それがアプレイウスにとっての「プラトン主義哲学」でありプラトンに近づく方法なのだということであれば、その限りでアプレイウスを哲学者だということはこれもまた至極穏当であろう。

## アプレイウスにとっての哲学とは何か

ここで、そもそもアプレイウスにとって哲学とは何だったのかを考えてみたい。「哲学者」ではなく、その哲学者が従事するところの「哲学」である。「哲学者」となると、その外見に関してなどたくさん証言が出てくるが、ここではその「哲学者」がするところの「哲学」をアプレイウスはどのようなものと考えていたのかということに焦点を絞る。

拙論で私は、『ソクラテスの神について』が正真正銘の「哲学のすすめ」、

プロテプレティコス・ロゴスであることを明らかにした<sup>26)</sup>。まずは次の一節に注目して頂きたい。

言えるものならあなたは言うてください。「私はソクラテスやプラトンやピュタゴラスが生きたようによく生きることはできないし、私は自分がよく生きることができないことを恥じていない」まさかあなたはこれを言いたいとは思わないでしょう（169-70）。

この一節に注目すると、アプレイウスが『ソクラテスの神について』をはじめから「哲学のすすめ」として論じていることが分かる。そこまでの説明から、つまり、上位の神々と下位の我々はダイモンという中間部分によってつながっていて、我々の中にもその中間部分が宿っていたり、守護霊としてその中間部分がいてくれたりするという説明を踏まえれば、「まさかあなたはこれを言いたいとは思わないでしょう」とアプレイウスは言うわけである。というのも、その中間的なものによって我々はよりよくなる事が出来るにもかかわらず、それをしないという宣言を行うことは、我々にとって恥ずべきことだからである。我々に比べてソクラテスは確かに遙か高みにいるのかもしれないけれど、それはソクラテスがダイモンを正義と高潔さで崇拜し世話をしていたからなのである。そして「ダイモンの世話は哲学への誓約に他ならないのです（170）」と語っているように、中間者であるダイモンの存在をむしろ根拠にして、アプレイウスは「哲学のすすめ」を行っているのだと言えるだろう。今ソクラテスのようにダイモンの声を聴くことができなかつたとしても、我々は「ソクラテスのように哲学が出来ず、よく生きられない」のではなく「ソクラテスを目指して哲学をし、良く生きるようにすべきである」のである。

とすると、アプレイウスの意図としては、「哲学のすすめ」をするため

---

26) 小島（2017）。

アプレイウスにとっての哲学とは何か？（小島）

に、その根拠となるダイモンの説明をしたのだと考えることが出来るわけだ。そして「哲学への誓約」であるところの「ダイモンの世話」が具体的に何をすることなのかと言うと、それはおそらく「学ぶこと」というようになるようだ。そのことは以下から読み取れるだろう。

「彼は高貴な生まれである」君は両親をほめているのだ。「彼は金持ちだ」私は偶然（幸運）を信用しない。そしてさらに私は次のことも勘定に入れない。「彼は強い」彼は病気に打ち負かされるだろう。「彼は敏捷だ」彼は年老いたらうごけないだろう。「彼はハンサムだ」しばらく待ちなさい。そうすれば彼はハンサムではなくなるだろう。「だが、彼は良い学術に精通しており、そして極めて、教養があり、そして人間の身に許される限りの知者であり、善に精通しているのですよ」ようやくついに君は、その男自身をほめてくれているね（176）

良い学術に精通し、教養があり、人間のみならず許される限りの知者であり、善に精通することを称揚することはおそらく端的には「学ぶこと」ということを称揚していることに繋がると言って良いだろう。

次に、先にも紹介した『プラトンとその教説』の3巻の *divisio librorum* と名付けられた一節に注目してみたい。そこには「真の哲学 (*vera philosophia*)」という表現が出てくるからである。

要するに特に今まで言及してきたこれらの作品の中のソクラテスの哲学の、それはつまり「真の哲学の」というのと同じなのだが、著者はプラトンであると私たちは考えてきた。他方、残りの作品の中では、他の人々の名のもとに他のやり方で議論している人々の諸々の原理が表現されているが、それにもかかわらずやはり、調和していることが理解される。さらに、それらの原理はピュタ

ゴラスとパルメニデスの教説から合わせて作られたのである。また、『法律』全十三巻は、プラトン自身である登場人物によって導かれているように見受けられる（*DP*. III. 14. 1-6.）。

ここで特徴的なのはアプレイウスがプラトンの作品群を独特の基準で三つに分けていることだ。一つはソクラテスが主に話者になっているとみられる作品群、次にソクラテス以外が主たる話者になっていると考えられる作品群、最後にプラトン自身が主たる話者である登場人物（アテナイからの客人）になっている『法律』の三つである。しかし、それらはすべて「調和していることが理解される」と言っている。まずアプレイウスは「真の哲学」はプラトンの著したソクラテスの哲学であるというが、他の（ソクラテスが登場しない）プラトンの作品もそれと調和していると語るのである。つまり、プラトンの作品全体に真の哲学があるということをアプレイウスは端的に示しているということになるだろう。

以上の二つを合わせて考えると、アプレイウスにとって哲学とは、何よりもまずプラトンの作品を読み学ぶことだったのではないかと思われる。

## 結びにかえて

ここまで、アプレイウスの研究および評価の歴史を今に至るまで辿り、「哲学者である」とか「ソフィストである」といったレッテル付けを現代の我々がすることにどんな意味があるのかといった乱暴な批判をしつつ、昨今のフレッチャーとモレッシーニの主張はそうした批判を乗り越えて通じる可能性のあるものだということを述べた。その上で、アプレイウスにとっての哲学者ならぬ哲学とは何かをテキストから探り、アプレイウスにとっての哲学は「プラトンの作品を読み学ぶこと」だったのだということを示した。

しかしまた、こういった理屈で、プラトンを読むことが哲学をすること

になり、よく生きることにつながるのだろうか。おそらくそれには「本当の知識であり得る〈正〉〈善〉〈美〉があるとし、それらについての無知を自覚し、それらを絶えず探求し続ける」といったような所謂「プラトンの生」、また、弛まぬ探求の生き方に人間が出来る最大の良い生き方があると考えて生きるソクラテス的な生き方を、生きるよう説得してくれるもの、説得し続けてくれるものがプラトンの作品だったからという想定をプラトンの読者であれば思い浮かべることだろう。また、新しく提供された『プラトンとその教説』の3巻は、アプレイウスがプラトンの作品を具体的にどう読んで理解したのかを考える主たる材料となるが、その調査は別の機会に譲りたい。

#### テキストと参考文献

- Freudenthal, J. (1887), 'Der Platoniker Albinos und der falsche Alkinoos', *Hellenistische Studien*, 3, Berlin.
- Giusta, M. (1960-1) 'Ἀλβίνου Ἐπιτομή ὁ Ἀλκινόου Διδασκαλικός', *Atti della Accademia delle Scienze di Torino, Classe di Scienze morali, storiche e filologiche* 95.
- Merlan, P. (1967), 'Greek Philosophy from Plato to Plotinus', Armstrong, A. H., (ed.), *The Cambridge History of Later Greek and Early Medieval Philosophy*, Cambridge: Cambridge University Press, pp. 64-73.
- Haight, E. H. (1963) *Apuleius and His Influence*, New York: Cooper Square Publishers.
- Sullivan, M. (1967), *Apuleian Logic and the Foundations of Mathematics*, Amsterdam: North Holland Publication Company.
- Dillon, J. M. (1977) *The Middle Platonists*, London: Duckworth. (reprinted with addenda 1996)
- Tatum, J. (1979) *Apuleius and The Golden Ass*, Ithaca and London: Cornell University Press.
- Whittaker, J. (1984) *Studies in Platonism and Patristic Thought*, London: Variorum Reprints.
- Groningen, B. L. H. Jr. (1987) 'Apuleius, Philosophus Platonicus', *Aufstieg und Niedergang der Roemischen Welt*, 36.1, Berlin: Walter De Gryter, pp. 395-475.

- Whittaker, J. (1990) *Alcinous, Enseignement des Doctrines de Platons*, Paris: Les Belles lettres.
- Moreschini, C. (1991) *Apuleius De Philosophia Libri*, Stuttgart and Leipzig: Teubner.
- Dillon, J. M. (1993) *Alcinous: The Handbook of Platonism*, Oxford: Oxford University Press.
- Habermehl, P. (1996) 'Quaedam divinae mediae potestates: demonology in Apuleius' *De deo Socratis*', *Groningen Colloquia on the Novel* 7, 117-42.
- Harrison, S. J. (2000) *Apuleius: A Latin Sophist*, Oxford: Oxford University Press.
- Harrison, Hilton and Hunink (2001) *Apuleius' Rhetorical Works*, Oxford: Oxford University Press.
- Gioe, A. (2002) *Filosofi Medioplatonici del II Seclo D.C., Testimonianze e Frammenti Gaio, Albino, Lucio, Nicostrato, Tauro, Severo, Arpocrazione*, Napoli: Bibliopolis.
- Swain, S. (2004) 'Bilingualism and biculturalism in Antonine Rome: Apuleius, Fronto, and Gellius', in Holford-Strevens, L. and Vardi, A. (eds.) *The worlds of Aulus Gellius*, Oxford: Oxford University Press, 3-40.
- Harrison, S. J. (2013) *Framing the Ass: Literary Texture in Apuleius' Metamorphoses*, Oxford: Oxford University Press.
- Fletcher, R. (2014) *Apuleius' Platonism*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Moreschini, C. (2015) *Apuleius and the Metamorphoses of Platonism*, Turnhout: Brepols Publishers.
- Stover, J. A. (2016) *A New Work by Apuleius*, Oxford: Oxford University Press.
- 小島和男 (2017) 「アプレイウスによる哲学のすすめ」、ギリシャ哲学セミナー編、『ギリシャ哲学セミナー論集』14、35-48頁。

